



神道(五) (大和世界の建設)

古事記

北と一 (3)

— 八卦と洪範九疇 —

竹葉 秀雄

第19号
 月 1 回 発行
 ひの心を継ぐ会
 〒799-1336
 住所: 愛媛県西条市
 上市甲 720-1

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は国家の鎮護となります
- 一 私達は大和世界を建設します

河図は伏羲の時代に、黄河から出現した竜馬の背にあったもので、伏羲がこれによって八卦を画したと謂い、洛書は禹の時代に、洛水から出て来た神亀の背にあった模様で、禹はこれによって九類即ち洪範九疇(疇は類の意。大法に九箇条の分類がある。)を作ったとも伝えられるが、書経の洪範によると、周の武王の十三武王は、箕の国に箕氏(殷の紂王の諸父)を訪ねて、天が冥冥の中に其民を安んじ、その止るところを得て和合せしめるための人の道を問うたのに対して、箕氏が教えたものとなっている。

「我聞く。在昔(こゝろ) 緜(みん) 洪水を陸(つち) 其の五行を汨(ご) 帝(上帝) 乃ち震怒し、洪範九疇を界(あ) 彝倫(い) の敦(と) る攸(い) なり。緜(緜) 則ち殪(や) 死せり。禹乃ち嗣(つ) いで興る。天乃ち禹に洪範九疇を錫(たま) う。彝倫(彝) の叙(い) する所(ところ) なり。」

として、一に五行、二に五事、三に八政、四に五紀、五に皇極、六に三徳、七に稽疑、八に庶徴、九に五福六極、を教えたのである。

洛書の九位と洪範の九疇とが一致されて洛書洪範となり、古来から尊重され、神意の発現するところとして畏敬されているのである。

洛書洪範図

二	五事	稽疑	三徳
七	咎	災	悔
六	九	五	一
福極	皇極	五行	
凶	平	吉	
四	三	八	
五紀	八政	庶徴	
吝	祥	休	

書経洪範九疇に謂う。

初の一に曰く五行、次の二に曰く敬(つ) んで五事を用う。次の三に曰く農(あ) く八政を用う。次の四に曰く協(か) するに五紀を用う。次の五に曰く建(た) てるに皇極(こう) 極を用う。次の六に曰く交(か) するに三徳を用う。次の七に曰く明(あ) かにするに稽疑(けい) 疑を用う。次の八に曰く念(おも) うに庶徴(しよ) 徴を用う。次の九に曰く嚮(む) かしむるに五福を用い、威(お) 威すに六極を用う。

一に五行。一に曰く水、二に曰く火、三に曰く木、四に曰く金、五に曰く土。水に潤下(うる) と曰い。火に炎上(えん) と曰い。木に曲直(ま) と曰い。金に従(したが) うと曰い。土は爰(こゝ) に稼(か) 穡(しよく) ず。潤下(うる) は鹹(かん) を作し、炎上(えん) は苦(く) を作し、曲直(ま) は酸(さん) を作し、従(したが) うは辛(しん) を作し、稼(か) 穡(しよく) は甘(かん) を作す。

二に五事。一に曰く貌、二に曰く言、三に曰く視、四に曰く聴、五に曰く思、貌に恭(こう) と曰い、言に従(したが) うと曰い、視に明(あ) りと曰い、聴に聰(そう) と曰い、思に叡(えい) と曰う。恭(こう) は肅(そう) を作し、従(したが) うは義(ぎ) を作し、明(あ) りは哲(てい) を作し、聰(そう) は謀(ぼう) を作し、叡(えい) は聖(せい) を作す。

三に八政。一に曰く食、二に曰く貨、三に曰く祀、四に曰く司空、五に曰く司徒、六に曰く司寇、七に曰く賓、八に曰く師。

四に五紀。一に曰く歳、二に曰く月、三に曰く日、四に曰く星辰、五に曰く曆数。

五に皇極。皇は其の有極を建て、時の五福を斂め、用て厥の庶民に敷き錫う。惟れ時れ厥の庶民、汝の極に于てし、汝に保極を錫えん。凡そ厥の庶民、淫朋ある無く、人、比徳ある無きは、惟れ皇極を作せばなり。凡そ厥の庶民、猷あり為すあり守るあらば、汝則ち之を念え。極に協わざるも、咎に罹らざるものは、皇則ち之を受けよ。而の色を康らかにし、「予の好む攸は徳なり」と曰わば、汝則ち之に福を錫えよ。時の人は斯れ其れ惟れ皇の極なり。烝独を虐して高明を畏るる勿かれ

人能あり為すあるもの、其の行を羞めしめば、而の邦其れ昌ならん。凡そ厥の正人、既に富ましめ方に穀くせよ。汝、而の家に好あらしむる能わずんば、時の人斯れ其れ辜あらん。其の徳を好む無きに于ては、汝之に福を錫うと雖も、其れ汝咎を用うと作さん。

偏無く跛無く、王の義に遵え。好を作すこと有る無く、王の道に遵え。悪を作すこと有る無く、王の路に遵え。偏無く党無く、王道蕩蕩たり。党無く偏無く王道平

平たり。反無く側無く、王道正直なり。其の有極に会し、其の有極に帰せよ。曰く、皇極の敷言を、是れ訓せば、帝に于て其れ訓わん。凡そ厥の庶民、極の敷言に、是れ訓い是れ行わば、以て天子の光に近づかん。曰く、「天子は民の父母と作り、以て天下の王と為る」と。

六に三徳。一に曰く正直、二に曰く剛克、三に曰く柔克。平康は正直、彊弗は剛克、變友は柔克、沈潜は剛克、高明は柔克なり。

惟れ辟福を作し、惟れ辟威を作し、惟れ辟玉食す。臣は福を作し、威を作し玉食する有る無し。

臣が福を作し威を作し玉食するあるは、其れ而の家に害あり、而の国に凶あり。人用て側頗僻し、民用て潜忒す。

七に稽疑。扱んで卜筮の人を建立し、乃ち卜筮を命ず。

曰く雨、曰く霽、曰く蒙、曰く駢、曰く克、曰く貞、曰く悔、凡そ七。卜は五、占は二を用う。忒を衍す。時の人を立てて卜筮を作さしむ。三人占えば、則ち二人の言に従う。

汝則ち大疑あれば、謀、乃の心に及ぼし、謀、卿士に及ぼし、謀、庶人に及ぼし、謀、卜筮に及ぼす。

汝則ち従い、龜従い、筮従い、卿士従い、庶民従う。是を大同と謂う。身其れ康彊にして、子孫其れ吉に逢わん。

汝則ち従い、龜従い、筮従い、卿士逆い、庶民逆うは、吉。

卿士従い、龜従い、筮従い、汝則ち逆い、庶民逆うは、吉。

庶民従い、龜従い、筮逆い、汝則ち逆い、卿士逆うは、吉。

汝則ち従い、龜従い、筮逆い、卿士逆い、庶民逆うときは、内に作すは吉、外に作すは凶。

龜筮共に人に違うときは、静に用うるは吉、作に用うるは凶なり。

八に庶徴。曰く雨、曰く暢、曰く燠、曰く寒、曰く風、曰く時。五者来り備わり、各々その叙を以てするときは、庶草蕃廡す。

一の極まりて備わるるは凶にして、一の極まりて無きも凶なり。

曰く休徴。曰く肅なるときは時雨若い、曰く又なるときは時暘若い、曰く哲なるときは時燠若い、曰く謀なるときは時寒若い、曰く聖なるときは時風若う。

曰く咎徴。曰く狂なるときは恒雨若い、曰く潜なるときは恒暘若い、曰く予なるときは恒燠若い、曰く急なるときは恒寒若い、曰く蒙なるときは恒風若う。

曰く、王の省みるは惟れ歳、卿士は惟れ月、師尹は惟れ日。

歳月日、時易る無ければ、百穀用て成り、又まること用て明かに、俊民用て章われ、家用て平康なり。

日月歳、時既に易れば、百穀用て成らず、又まること用て昏くして明かならず、俊民用て微に、家用て寧からず。

庶民は惟れ星。星に風を好むあり、星に雨を好むあり。日月の行には、則ち冬あ

り夏あり。月の星に従うときは、則ち以て風雨す。

九に五福。一に曰く寿、二に曰く富、三に曰く康寧、四に曰く好む攸は徳、五に曰く考終命。

六極。一に曰く凶短折、二に曰く疾、三に曰く憂、四に曰く貧、五に曰く悪、六に曰く弱。

以上長くなつたが全文を載せた。師友会のお互は、東洋政治道德の淵源をなす洪範九疇を一通り知っておくことが大切と思うて。第五の皇極が力説されているのは、この九五の位を踐むものの峻命の易からざるをもつてである。古来支那の道統は日本から伝えられたとする人達があるが、私もこの皇極を熟読して、この皇極の道は天之御中主神の理法であり、その光顕であらせられる天照大御神の御神徳が示されているのであり、この道を委託させ給うた日嗣の皇孫によって、計り知れない神代の古から絶ゆることなく、現代の天皇にまで受け継がれているこの事実。立極垂統の道が厳然と存在していることは、日本が宗家であり、この道が支那に伝えられて、洪範九疇となつたときか考え様がないのである。また、亀卜占筮を重んじている。君主哲人庶人政治とともに亀筮によって神意を窺う神政政治も宣べている。これは、八百万神々を安の川に神集え、禊祓して会議を開き、それを思兼神（一人と考えなくてよい）哲人に考えせしめ、更に、太麻爾に占えて神意を伺われた神代日本の政治が伝つたものであり、亀筮などの占のことも古典に残されて居り、殊に八卦の陰陽、奇偶の数理は、伊邪那岐命の神言より発せられたものである。川面凡児大人が大祓詞の「天津金木を、本打ち切り末打ち断ちて」は今の算木であり、「天津菅麻を、本刈り断ち末刈り切りて、八針に取辟きて」は著、今の筮竹で、大国主、少彦名の神々が船で渡つて教え伝えられたもの、竜馬と云い、亀というのは舟であると述べていられるは決して荒唐の言とすべきではない。

第二章 農の史的考察

第二節 本邦史の変遷概観

菅原 兵治

平安遷都

桓武天皇の平安遷都は何故に行われしか。数々の理由もあろうが、其の本質的は政治を一新して、素朴に帰す為であると見るを妥当とすであろう。京都の地たるや、当時は決して「京都」ではなかった。文字通りの「山背」「山城」であったのである。帝都を「咲く花の奈良の都」から「山背」の国に遷すということは、決してあだなる文化生活の華やかさに憧れてのことではない。之によって一は爛熟し切つた当時の人心を一新すると共に、一には政治を仏教より解放することを図つたものである。而してこの遷都たるや決して尋常の手段によって易々として行われたものではない。それは実に、大化の改新を断行し給える天智天皇の曾孫たる桓武天皇の英邁にして「桓武」なる御氣象によって、始めて断行せられたものである。一遷都は常に其の国家に於ける政治的大改革と相俟つて行われるもので、多くの場合は、旧来の都の浮文的墮落の状態から政治を救うべく、未開素朴の地に新しく都を建設するを常とする。平安遷都は正しく其の目的を実現する為の遷都であつた。（此の点より見て、此の遷都は明治維新に、政治的に殆んど無勢力なりし京都より、一國政治経済の事実上の首都の觀あり、而して三百年の泰平に馴れた江戸に遷都したのとは、大なる違いがある。）

平安末期

かくて遷都当時の京都には、随つて国民には、新鋭なる素朴剛健の男性的氣象が横溢し、之と相俟つて国民的精神が勃興していた。吾々はそを、従来叛服常無かりし東北アイヌ族の遠征に於て見ることが出来る。更に弘法、伝教の二高僧のなせる仏教の日本化的努力に於て見ることが出来る。然るに其が平安末期に到るや、遂に彼の繊細優麗なる女流文学によって象徴せらるる浮華文弱なる女性的生活に墮してしまつたのである。且つ当時は遣唐使の派遣が盛にして、入唐の留学生は燦然たる盛唐の文化に酔いて、自らを「我是東蕃客、懷恩入聖唐、欲帰情未盡、別淚湿衣裳。」とさえ歌うに到つた。かくて京都の公卿はらはら国體の本質も、國家の経綸も外所に、唯々「此の世をば我が世とぞ思ふ望月の、かけたることの無しと思ひ」

つつ、其の日其の日を詩歌に戯れ、管弦に酔うて、唯々享樂生活に溺惑していたのである。

然し望月を永久にかけることなしと思ふことの其のことが既に誤っている。一体月の盈虚を文質關係より見れば、新月は質であり、満月は文である。文たる望月を永久に持続せんとする望がもはや浮文的迷妄である。かくて彼等が望月の生活を誇りつつある時は、既に一方より其の望月の虧けつつあるときであつたのである。

武士の勃興

かくて京都の公卿が全く実力を失つて来たのに際して如何にして武士が政治的実権を握るに到りしか。之は実に興味ある問題である。

藤原氏一族の浮華に乗じて、地方に幾多の瀆武的勢力があらわれて来た。即ち中央に志を得ざる有為の人士が地方に行つて永住し、多くの家の子弟を養ひ、大なる土地(莊園)を領有して、各地々に豪族として傲居していた。この豪族の間に激烈にして露骨なる生存競争が起り、私闘所在に行われて、遂には中央を脅かす大乱を生ずるに到つた。天慶の乱、前九年、後三年の役等はこれである。而して諸大寺は又多くの莊園を有して数千の僧兵を養つて横暴を恣にしていた。

此等の間に在つて、其の棟梁として勢力を振つたものは、源平の両氏であつた。藤原氏は事ある毎に此の武士を頼んで、地方の暴乱を鎮め、自己の利権を擁護していた。かくて従来は「侍い」として、貴族公卿の従者に甘んじていた「侍い」は、眠れる獅子が刮目して、己が身に潜める力を自覚して戦き立てるが如く、俄然として自信自重の念を生じ来り、起つて以て藤原一族の地位に代らんとする大望を抱くようになって来た。最後は実力がものをいう。遂に武家の時代が来た。かくて源平の両氏が暫くの間覇を争つていたが、保元平治の乱に於て、遂に勝利は平氏に帰し、武家の力を以て天下を掌握した。

然し平氏は同じ武士と雖も源氏に比して、何れかといへば種々の点より多分に文的性質を有している。その平氏が浮華の都京都の地に於て政権にありついたのである。彼等の「武士」という名称は瞬間の空名に過ぎなかつた。彼の自利的な政治、貴族の生活其の儘な浮華な生活は、「驕るもの久しからず、春の夜の夢如く、」やがて源氏の素朴にして強剛なる「質」によつて打滅ぼさるるに到つたのである。

かくて第一に名乗りを挙げた源氏の勇者は、快男兒木曾の冠者義仲であつた。彼は文字通りの野人であつた。然し「巧言令色仁鮮し。」「剛毅朴訥仁に近し。」で、

彼には京のやさ男の輩よりも却つて「まこと」があつた。かかる心から私は義仲に就いて故森滄浪先生が在りし日の中秋の一夜、私に与えた次の謡を何時もながら非常な興味をもつて詠む。

田舎育ちとそしらばそれれ
木曾の冠者は好い男。

深山み離れし荒鷲の

叩く羽風に散る花や

都の空に時めきし

驕る平家も一碎き。

冠装束身に添いかねて

京の公卿衆の笑い草。

ままよ、美人の膝枕

怒るも、笑うも夢の中。

まんざら実が無いならば

よもや巴も惚れやすまい。

木曾の旭も登れば落ちる

落ちて栗津の夕煙、

散るは涙か草葉の露か、

鎧にかかると一雫、

情のほどが見えるぞえ

覚めて身にしむ遠山嵐

野辺のみどりを吹くわいな。

(木曾公を詠うたず 滄浪醉書)

正に「野」そのものの義仲の性格が躍如としてゐるではないか。然し義仲には瀆武と称さるべき処があつた。彼には憾むらくは、破壊はあつたけれども建設が無かつた。雑草に火をつけて焼き払いしたが、愈々開墾した後には時くべき新しい種子と之を培うべき肥料とが無かつた。而して彼の破壊の後に新しい武家政治の基を建設したものこそ誰あるう。或は伊豆に、或は平泉に幾年かの忍苦の生活を嘗め盡した流人頼朝義経の兄弟の率いる関東東北の野武士「東夷」ではなかつたか。

自治と財産

三浦夏南

人の思いこみは不思議なほどの力を持つ。特に社会一般の流行に順応することを以て常識と心得ている多数の日本人にとっては強烈な影響力がある。古き良き日本人が斯くの如く大勢順応の民族であったかは分らない。これは研究すべき重要なテーマであるが、ともかく我々の知る戦後の日本人はとにかく時勢に流されやすいことを特徴としている。今号は財産について考えてみようと思うが、強烈な刷り込みによる思い込みによって、日本人は一億総貧困への道を突き進んでいるかもしれない。

愚なる者を我が国では「たわけ」と呼ぶが、これは文字通り田を分けるもの、財産を分割することを戒める言葉である。つまり本来財産は一族一家を以て総合し保有するものであり、その最終決裁権は常に家長が掌握すべきことを表している。財産は土地であれ、貨幣であれ、不動産であれ、家族が生活して行く物資を供給する基礎であり、これを分割することは、生活を分割することになる。経済の根本を分かつということとは、一家の精神を分断し、共同を不能にすることを意味する。血と心さえ通い合えばと現代人は言うかも知れないが、現在の悲惨な日本家庭の有り様を見れば甘いことばかりは言っていられないだろう。物と心は一体であり、物質による生活を分ければ、精神も乖離し行くことは人の自然である。

財産を分割することはその家の成長力を著しく損なうことになる。資産は集まるところにさらに集まる性質を持っており、ある水準を下回れば、資産が経費により相殺される状態に陥ってしまう。資本主義においては、この分割され自立的な経済基盤を持たぬ労働者こそ労働の面でも消費の面でも不可欠の要素であるが、自立した臣民を以て国の基礎とする我が国にはそぐわぬものである。

卑近な例で考えてみると仮に三世帯の家族十人が完全に思想を統合し、生活を共同していたと考えると必ず人手的にも資金的にも余剰が生じてくる。この資金的余剰を投資すれば、さらなる財産を生み出すことが出来るし、人的余剰を教育に注げば次世代の強化を図ることが出来る。子どもにはお金がかかると言っても経済的理由から出産を制限する人も多い現代にあつて、人的、資金的余剰があれば、次世代の子供は多く生み育てることが出来る。そして経済も教育も自前であれば、お金のかかる現代社会へ子供を預ける必要もなく、濃厚な家族のコミュニティで家への忠誠心を育まれた子供達は成人して新たな資産を生み出す仕事の担い手となるのである。このように財産は一家の中心に統合され一括して管理されることにより、無限の余剰を生む可能性を秘めているのである。

翻つて現代の一般的な日本人を見てみるとこの逆のことをして自ら貧困を招いている。まず一族を分解し、核家族とするので、資本が分散してしまう。資本がなければリスクを回避する為、会社などに雇われて働く必要性が出てくる。家に残る人手が少なく、或は皆無であるので、子どもの教育が疎かになり、教育を学校等外部へ依存しなければならなくなる。外部へ委託すれば、必ず費用がかかる。さらにせっかく育てた子供達も学校にて資本主義に奉仕する労働者、消費者、個人主義者として洗脳される為、成人後家の為に働いてくれることはないのである。さらに家を分割して新しい家を作り、そこで同じことを繰り返して行く。これでは分割に分割を繰り返した末余剰が生まれなくなり、余剰の欠如はさらなる依存を生み、依存は経費を増大させ、さらに余剰を奪われるという貧困のスパイラルへと入っていくのである。そしてこの過程で分割された生活は家族の精神的疎遠感を生み、遂には家族とは名ばかりの利害で繋がる個人の集団となり果ててしまうのである。

思い込みとは恐ろしいものであり、教育とは凄まじいものである。わざわざ仲睦まじい家族を分解して孤独で寂しい個人となり、豊かな資産を分割して貧乏な労働者となる。こんな恐るべき宗教を信じてそれを常識としているとは一寸考え難いものであるが、小学より大学に至る十六年の学校教育とその後の所謂社会生活とは、この一見受け入れ難いイデオロギーを骨の髄にまで浸透させるのである。我々はこの負のスパイラルより断固たる態度で脱出し、確固たる一族の基盤を打ち立て、そこに育つ真の自立した臣民を生みださねばなるまい。

とよくも農園だより

三浦 美恵

今月は里芋掘り、秋野菜の手入れ、ネギの出荷、アスパラガスの定植の準備定植を行いました。

地域の秋祭りが終わる十月半ばからは里芋の価格が下がるため、それまでに会員の寺川正一さんや有志の方に協力していただきながら、畑一枚分の里芋を掘りきました。今月も会員の藤本秀行さんが連日お手伝いに来て下さり、良いテンポで掘りきることができました。掘った芋の一部は万葉苑にも持っていき、参加者皆で芋炊きを頂きました。県外出身の私は芋炊きに馴染みがありませんでしたが、郷土の名産である里芋が料理の中心になり、大勢で机を囲って食べられる芋炊きは、愛媛の素敵な文化だと感じました。来年も多くの里芋を育てていこうと考えています。そして一旦秋祭りが始まると農業はお休みです。私達の住む部落はお祭りでは獅子舞があり、主人と義弟の颯君は二日間二〇〇件を回りました。慣れないながらも教わった舞をして帰宅した時にはくたくたでしたが、お祭りを通して地域の方とも触れ合うことができたようでした。

続いて秋野菜の手入れを行いました。先月定植した野菜はすくすくと育ち、大根やカブは必要以上に沢山の芽が出ていたので間引きをしました。間引きは地道な作業ですが、清掃と同じで終わった後に心地よい達成感があります。風通しがよくなり、大根の葉っぱも気持ち良さそうに揺れていました。

そしてネギの出荷についてです。八月末に定植したネギは青々と育ち、収穫されるのを今か今かと待っているようです。里芋やハウスの事で疎かになって収穫時期



を逃さないよう、こちらも順々に採って行かなければなりません。

最後にアスパラガスについてです。今月末の苗の定植に向けて、支柱をたてたり灌水設備を整えたりしました。ハウス自体は補助金が下りて業者の方が建ててくれるのですが、それ以外の灌水設備、電柱建て、支柱建てや草管理・土壌づくりは補助金の対象外のため、自分たちで一つ一つ準備を進めてきました。農業・外仕事の経験が無い私達は、電柱一本立てるのに、また鉄筋一列真つすぐに立てるのにも苦戦していたと思います。今月も杏奈さんのお父さんに来ていただき、一つ一つやり方を教えて頂きました。一緒に仕事をしているやり方というものがあり、このように専門的な技術をもった人々によって今まで伝統が守られてきたのだと感じます。今、各界で機械化や省略化がすすめられ、その結果、高度な技術が受け継がれなくなっています。嘆くことは多いですが、自分達にできることを一步一步地道に積み重ねていきたいと思えます。



★活動報告

・十月二十三日(水)十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

・十月三十日(水)十九時～二十一時 勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

★今後の予定

・十一月二十日(水)十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

・十一月二十三日(土)十三時～ 秋季例大祭(初穂祭)
大和神社(愛媛県東温市樋口)

・十一月二十七日(水)十九時～二十一時勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

年会費

- ・一般会員 三千元
- ・賛助会員 一万円
- ・特別賛助会員 三万円
- ・支援会員 一万円

